口頭発表「子どもたちの豊かな成長を促す動物飼育の実践」

江口　尋信

○モルモット飼育の経緯

本校の敷地内には飼育小屋はありますが，20 年以上前からうさぎやニワトリなどの動物を飼っていません．また，生活科のカリキュラムには植物の栽培活動を位置付けており，子どもたちと動物との関わりはほとんどありませんでした．

そのような中，令和３年度から，大手前大学教授，中島由佳先生の研究（「持続可能な学校飼育プログラムの開発と評価」）の協力校として，ホスティング方式で２年生がモルモットを飼育することとなりました．本校は，ホスティング方式によって次の二つの支援を受けています．

・飼育ケージやシート，餌などの提供を受ける．
・長期休業中に，獣医師さんにモルモットを預かってもらう．

１　モルモット飼育の方針

モルモットの飼育にあたっては，校内で以下の三つのことを確認しました．

・モルモットの教材化を図りカリキュラムに位置付けることで，意図的・計画的に学習を進める．
・学級を主な飼育場所とし，学級全員が飼育に関わるようにする．
・２年生の時，１年間だけモルモットの飼育を行い，年度末には１年生（次年度２年生）に飼育を引き継ぐ．

(1) モルモットの教材化

モルモットを題材とした学習は，主に生活科 (7)「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う」で行うようにしました．また，学級活動 (1) ーア 学級会「モルモットの名前を決めよう」や道徳科の内容項目 D－(17)生命の尊さ，図画工作科「A 表現」絵に表わす，国語科「B 書くこと」でもモルモットを題材に授業を行うようにしました．

(2) 学級全員が飼育に関わるために

子どもたち全員を飼育に関わるようにするためには，モルモットを飼うことに対する保護者の不安を払拭し，理解を得る必要があります．そこで，モルモットを飼う前に児童のアレルギーアンケートを実施しました．事前に，獣医師さんからモルモットによるアレルギーはほとんど起こらないことを聞いていましたので，そのことも保護者に伝えました．また，飼育が始まった後も，保護者の理解を得るため，飼育や学習の様子を載せた「モルモットだより」(教頭によるアイディアです．) を作成し，全校の家庭へ配布しました．

全校に配布した「モルモットだより」

護者の不安を払拭し，理解を得る必要があります．そこで，モルモットを飼う前に児童のアレルギーアンケートを実施しました．事前に，獣医師さんからモルモットによるアレルギーはほとんど起こらないことを聞いていましたので，そのことも保護者に伝えました．また，飼育が始まった後も，保護者の理解を得るため，飼育や学習の様子を載せた「モルモットだより」(教頭によるアイディアです．) を作成し，全校の家庭へ配布しました．

事前のアンケートや「モルモットだより」の発行などにより，２年生全員が安心して飼育に関わることができています．

２　学習の様子

(1)モルモットとの出会い（生活科）

６月，ホスティングでモルモットを預かってくださる獣医師さん２名が，モルモット３匹を持って来校されました．獣医師さんに，モルモットの特徴や飼い方を説明してもらい，その後，子どもたちとモルモットの触れ合いの場をつくりました．子どもたちからは，「かわいい．早く抱っこしたい．」，「飼うのが楽しみだ．」などという飼育への期待が込められた言葉が聞かれました．

写真１：抱っこの仕方を教えてもらう児童

(2)名前を決める学級会（学級活動）

モルモットを飼うようになって間もなく，各学級でモルモットの名前を決める学級会を開きました．学級会では，モルモットの色やイメージ，名前の覚えやすさなどから下のような意見が出されました．

学級会の主な意見

C1:雪のように白いから「ゆきちゃん」がいいと思います．
C2:「ゆきちゃん」だったらみんなが覚えやすいので賛成です．
C3:女の子なので「ゆきちゃん」に賛成です．

写真２：学級会の様子

学級会の結果，１組が「ゆきちゃん」，２組が「モコちゃん」，３組が「シロちゃん」に決まりました．自分たちで話し合って名前を決めたことで，ますます自分たちのモルモットであるという気持ちを高めました．

(3)当番を決め，お世話をする（学級活動）

一部の子どもだけでなく全員がお世話に関わるようにするために，輪番による当番制にしました．４，５人ずつのグループをつくり，グループで飼育ケージの掃除，餌やり，水替え等を行うようにしました．

最初は担任に手伝ってもらいながらお世話をしていましたが，日が経つうちに，子どもたちは，自分たちだけでお世話ができるようになりました．これは，一つの大きな成長です．

写真３：自分たちだけでお世話をする子どもたち

また，お世話を通して，モルモットが新聞によく潜ることに気付いた子どもたちは，モルモットは穴に入ることを好むのではないかと考え，画用紙で筒を作り，ケージの中に入れました．

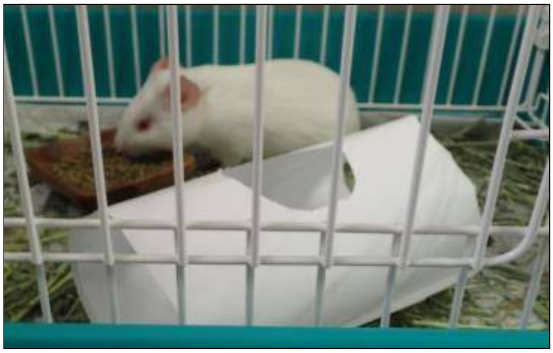


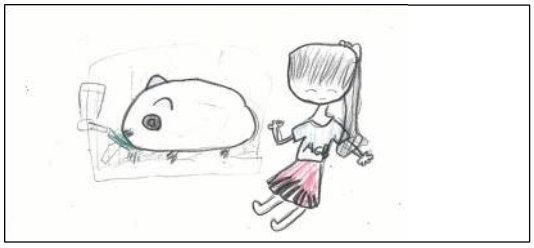
写真４：子どもたちが画用紙で作った筒

すると，案の定，モルモットは筒の中によく入りました．子どもたちは自分たちの工夫に大満足でした．

(4) モルモットの観察（生活科）

生活科の学習で，継続的にモルモットの観察を行いました．観察では，大きさ（身長，体重）を調べたり，モルモットの様子を絵と文で記録したりしました．

A 児がかいた観察記録の絵



子どもたちの観察記録の絵の特徴ですが，ほとんどの子どもが，自分とモルモットが横に並んでいる絵を描きました．（「A 児がかいた観察記録の絵」参照）モルモットに強い親しみや愛情をもっていることが伺えます．

また，文章には「長生きするようにお世話を頑張りたい.」「大切に育てたい.」等，命あるものを飼う責任感が伺える記述がありました．

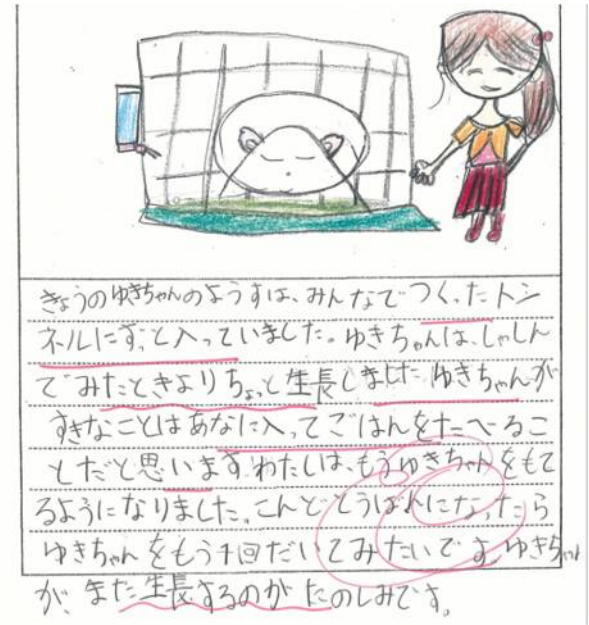
写真５：観察記録をかく児童の様子

(5)観察記録から見える児童の成長

ア　A 児の記録から

次の観察記録は，お世話を始めて２週間後に A 児がかいたものです．A 児は，モルモットが少し大きくなったことや，穴に入って餌を食べることが好きであることに気付いています．また，「わたしはゆきちゃんを持てるようになりました.」という記述から，モルモットと関わる自分の成長にも気付いています．

A 児の観察記録（２週間後）



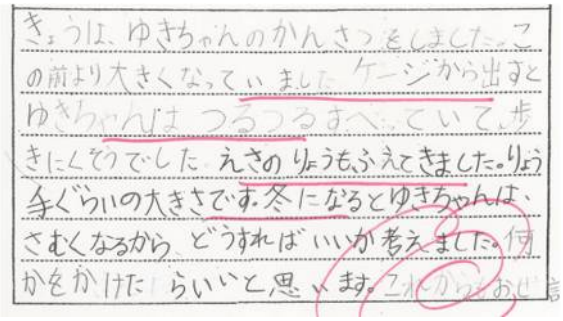
A 児の１ヶ月後の観察記録を見てみると「ゆきちゃんのおなかが温かかったです.」と，モルモットの体温をしっかりと感じ取っていました．また，この頃の A 児は，糞を嫌がることなく直接触って掃除をしたり，「うるさいとゆきちゃんが怖がるよ.」と言って友だちを注意したりするなど，モルモットへの愛情に基づいた行動を取るようになりました．

A 児の観察記録（１ヶ月後）

A 児の６ヶ月後の記録を見てみると，季節が変わり冬になったことから，モルモットが寒がらないか心配をしています．そしてどうしたらいいか自分なりに考え，何かを掛けて

あげたらいいのではないかと結論づけています．自分で課題をもち，考え解決しようとすることは，A 児にとって大きな成長でした．

A 児の観察記録（6 ヶ月後）

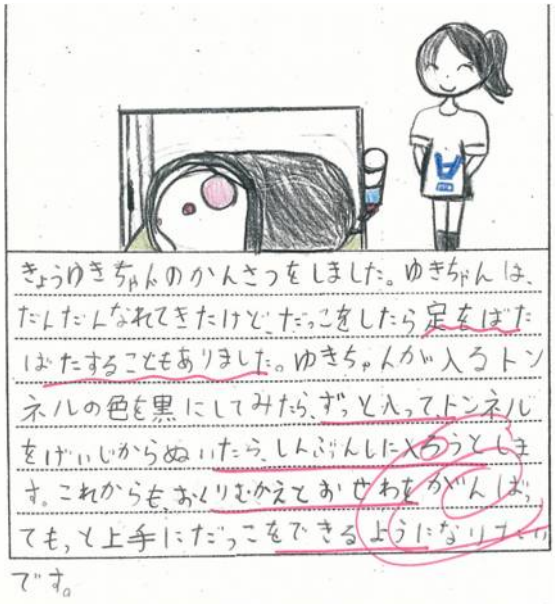

きょうは、ゆきちゃんのかんさつをしました。この前より大きくなっていました。ケージから出すとゆきちゃんはつるつるすべっていて歩きにくそうでした。えさのりょうもふえてきました。りょう手ぐらいの大きさです。冬になるとゆきちゃんは、さむくなるから どうすればいいか考えました。何かをかけたらいいと思います。これからもおせ

イ　B 児の記録から

次に B 児の観察記録（２ヶ月後）について紹介します．

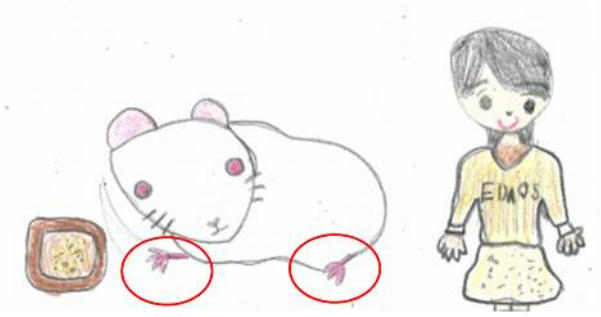
B 児は，飼育を行う中で，ゆきちゃんが好きなトンネルの色があるのではないかと考え，あれやこれや色を試しながら調べました．そして，黒色が一番好きなのではないかと結論付けました．モルモットが喜ぶ環境をつくろうと，好奇心を持って飼育にあたっていることが分かります．

B 児の観察記録（2 ヶ月後）


きょうゆきちゃんのかんさつをしました。ゆきちゃんは、だんだんなれてきたけど、だっこをしたら足をばたばたすることもありました。ゆきちゃんが入るトンネルの色を黒にしてみたら、ずっと入ってトンネルをげいじからぬいたら、しんぶんしに入ろうとします。これからも、おくりむかえとおせわをがんばってもっと上手にだっこをできるようになりたいです。

下の絵は，飼育を始めて６ケ月に B 児がかいた観察記録です．

B 児の観察記録（6 ヶ月後）



２ケ月後に描いた絵と比較すると，ひげを描き，前足と後ろ足の指の本数が正しく描かれています．教師が細かく観察するように言わなくても，モルモットに関わる中で自ら詳細に観察し，絵で表現することができました．このことは，B 児の大きな成長です．

(6) モルモットの誕生会（学級活動）

３月に，担任がお楽しみ会（集会活動）をしようと投げかけたところ，子どもたちは，ゆきちゃんの１歳の誕生会をしたいということを言い出しました．正確な誕生日は不明でしたが，獣医師さんの話を思い出し，３月９日をゆきちゃんの誕生日だと決め，会の計画を立てていきました．

誕生会は，「ゆきちゃんの誕生日の歌」をみんなで歌い，「ゆきちゃんへのプレゼント渡し」，「交代で抱っこ」という内容でした．

写真６：誕生会（交代で抱っこ）の様子

子どもたちが用意したプレゼントは，「おめでとう」というメッセージが入った手作りの「トンネル」でした．すっかりモルモットは学級の一員として子どもたちに認知されています．

写真７：プレゼントの手作り「トンネル」

(7) モルモットとのお別れ（生活科）

４月に進級する子どもたちは，年度末をもってモルモットとお別れとなります.

本校では，モルモットの飼育を通して，命の大切さを学ぶことを大切にしたいと考え，子どもが責任を持ってお世話をすること，「モルモット（命）の引き継ぎ」を行うこととしました.

子どもたちは３年生になっても，引き続きモルモットを飼いたいと言いましたが，２年生（現１年生）が引き継いで大切に育てるということを担任がしっかりと話し，どうにか納得してもらいました.

３月，２年生の子どもたちが１年生の教室へ行き，モルモットのお世話の仕方を説明しました．２年生は，これまで大切に育ててきたモルモットなので，大事に育ててほしいという，自分たちの思いを一生懸命に伝えました.

そして，お世話の仕方については，１年生が困らないよう，実演して見せながら具体的に，詳しく説明しました．２年生の思いを感じた１年生も，分からないことを積極的に質問してお世話の仕方を理解しようとしていました.

写真８：１年生にお世話の仕方を見せる２年生

写真９：お世話の仕方を質問する１年生

３　成果と課題

本取組の成果と課題は以下のとおりです.

(1) 成果

成果は３つです.

①日頃，なかなか自分から学習対象に働きかけることが少ない子どもたちを含めて，どの子どもも強い興味・関心をもって，進んでモルモットに関わることができた.

②本取組では，日頃のお世話と生活科の学習を中心にモルモットに関わっていったが，モルモットが生命を持ち成長していることに気付き，親しみを持って大切に育てようとする態度が見られた．いずれも，生活科の中心的なねらいである.

③モルモットを介して学級集団のまとまりが見られた.

不登校の子どもが，放課後，学校へ来てモルモットのお世話をしたり，特別支援学級の子どもが交友関係を広げたりしたことは，予想外の大きな成果であった.

(2) 課題

課題は２つです.

①本年度は，生活科や他教科等における教材化を手探りで行ってきた．当然，大きな成果もあったが，もっとこうしたらよかったという課題も残った．そこで，本年度の実践をカリキュラムに反映させていき，次年度以降の教育活動の充実を図っていく必要がある.

②現在，ホスティング方式によって飼育を行っている．このことにより，①餌をはじめとする飼育に係る諸経費，②長期休業中の飼育という二つの負担がほとんどな

い状態である．来年度以降，ホスティング方式が終了した場合，モルモットの飼育を継続できるのか大変不安なところである．

カリキュラムに反映することで意図的・計画的な指導ができるが，一方で，持続可能な飼育体制を構築する必要がある．

おわりに

モルモットの飼育が，子どもたちの豊かな成長を促したことは間違いありません．今後，この確かな手応えをどのように教育活動に活かしていくのか考えながら学校経営を行っていきたいと思います．

（福岡県太宰府市立太宰府西小学校長）